

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 13 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870001

研究課題名(和文)「身体の機能地理学」に関する社会哲学的研究

研究課題名(英文)A social philosophical study on "functionalist geography of bodies"

研究代表者

見附 陽介(Mitsuke, Yousuke)

北海道大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：10584360

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は障害の問題および高齢化の問題などを視野に入れながら、身体と環境の間の機能的関係を空間の社会的構成という観点から研究するものである。この趣旨に則り研究期間内には、一つには障害の問題をテーマとして、身体と社会的物理空間の間の機能化と非機能化の問題を検討し、「身体制度」という新しい分析の視点を提起した。また同様の問題を規範的観点からも考察し、アマルティア・センのケイバビリティアプローチなどを参考としつつ、カント以降の自由思想の身体論的展開の可能性を明らかにした。両研究はともに論文として出版されている。またさらなる研究の展開に向けて、モダニズム建築と社会的空間構築の分析に向けた研究も行った。

研究成果の概要(英文)：This study aims to research functional relations between bodies and environments as socially constructed spaces for the issues of disability and aging societies. It has achieved two main results in the implementation period. Firstly, a new analytical concept called "body institution" was presented by investigating the enabling and disabling functions of social physical spaces. Secondly, as a normative study of the same theme, it elucidated the possibility to rethink Kant's theory of freedom from the perspective of the physically feasible freedom, to which Sen pays attention in his critique of Rawls's theory of justice. Both results were published. In addition, a study of relationship between modernist architecture and social construction of spaces has been implemented for further development of this study.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：哲学 倫理学 社会学 障害学

1. 研究開始当初の背景

本研究が開始当初に一つのテーゼとして掲げたのは、「「老い」とは身体的現象であるだけでなく、社会的現象でもある」というものであった。社会の高齢化は、当の高齢者ではなく、我々若い世代に突き付けられた重要な課題としてとらえるべきである。仮に上記のテーゼを確認することが出来れば、我々は単に手をこまねている状態を脱して、この問題に対して明確な一つのアプローチ方法を見出すことが出来るようになると思われる。

老いの中心現象は機能低下と考えられるが、この機能低下は単に生理的現象としてだけでなく、同時に身体と環境との機能的不一致から生じるものでもあることに本研究は着目した。この後者の観点から、身体と環境との機能的関係を整備することが高齢化への一つの対応手段となると考えることが可能である。

しかし身体と環境の機能的関係とは何か？ 環境を整備するとはどういうことか？ 本研究はこの根本を社会哲学的に解明することを目指した。

この主題を本研究では、「身体機能地理学」としてテーマ化した。ここには H・ルフェーブルからポストモダン地理学へと至る思想的背景がある。ルフェーブルの重要な功績は、空間を所与と捉える「空間のフェティシズム」を脱して、その社会的構築の背景にまで批判のメスを入れた点にある。空間は社会的に作られており、空間を通じて人々はある一定の社会的支配を受けている。E.W. ソジャはこのような社会哲学的な観点に立ったルフェーブルの「空間と社会の間の関係の一般理論」を《空間弁証法》として再構築し、批判理論に空間論的転回をもたらすポストモダン地理学を提起した。本研究はいわばこの空間研究の地理学的アプローチを身体論の場面に導入するものとして提起されたものである。

参考文献

アンリ・ルフェーブル、斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店、2000年

エドワード・W. ソジャ、加藤政洋ほか訳『ポストモダン地理学：批判的社会理論における空間の位相』青土社、2003年

2. 研究の目的

以上の観点から本研究は二つの目的をもって計画された。一つは、(A):「身体と社会的物理空間の間の機能的関係を分析する理論的枠組みの研究」である。もう一つは、(B):「上記の分析を通じて現代社会を批判的に理解するうえでの規範の確立」である。

(1)(A)について

「身体と社会的物理空間の間の機能的関係を分析する理論的枠組みの研究」という目的

を達成するために、本研究では二つの観点からアプローチを試みる。

：「身体制度」概念の確立

身体制度とは環境中に埋め込まれた身体の運用の枠組みを示す造語として案出されたものである。本研究は障害が生じる具体的場面をとくに身体と環境の関係から検討することで、この身体制度概念の構築を目指すものであった。

障害学の分野では、障害を個人の属性としてではなく、環境を通じて社会的に構成されたものとして捉える理解が支配的であり、その意義は障害解消の責任を個人ではなく社会のうちに見出すことにあった。しかし、この従来の社会的構成の理解は、もっぱら障害の表象/イメージをめぐるものとして展開されていた。本研究がその構築を目的とした身体制度概念は、いわば同じ議論をしかし表象ではなく物理的機能の観点から展開するために必要とされるものである。我々はこの身体制度に自己の身体を同一化させることが出来たときに一定のエージェンシーを付与され、同一化ができなかったときに機能を実現できない状態に置かれることになる。これをとくに障害者差別の豊富な事例などに依拠して根拠づけたうえで、その成果に基づき空間と身体の機能的関係を解明することが課題となった。

：身体制度と社会的原理の結びつきの研究

本研究は、同時にこの身体制度の問題がどのようにして他の社会的原理と結びついているかを考察し、その結果をとくに身体の排除という観点から検討することも目指した。

本研究は、とりわけ高齢者や障害者に機能低下をもたらす障壁として《標準化》の社会的作用に着目した。とくにテイラー主義またフォーディズムなどの標準化による大量生産方式を通じて顕在化される近代の基本的原理と身体制度とがどのように結びついているかを解明することを目指した。

(2)(B)について

本研究は分析的な研究と同時に、規範的な研究も展開するものとして計画された。

主体的な自律性や自尊心と承認、財の平等な配分といったことが社会的な規範として一般的に想定され得るが、本研究はこういった従来の規範が身体と社会物理的空間の問題にどのように関わるか、あるいは関わり得ていないかを研究することを目指した。とくにアマルティア・センのロールズ批判の身体論的解釈の可能性に基づいて、この問題を《身体の承認としてのケイパビリティ》の点から検討することが本研究の課題となった

3. 研究の方法

上記の通り、本研究は二つの要件から成り立っている。一つは、諸事例から一般的モデ

ルを求める理論的研究であり、もう一つは、明らかにされた現状を規範と突き合わせる批判的研究である。本研究はフィールド調査は行わず、文献に依拠した事例探索を行った。既に豊富な蓄積のある障害者差別に関する資料や、また産業論や労働史において蓄積されてきた近代工場労務管理に関する資料などが事例探索先となった。これら諸資料から事例を抽出し、実際に前者の諸事例から《身体制度》という分析のための概念を確立した。具体的には、障害当事者の手記、障害を持つ人々の排除事例に関する既存のフィールドワークのレポート、あるいは地方自治体の公表する障害の事例集などにあたり、分析事例の収集を行った。

標準化と身体制度の結びつきに関しては、後者の近代工場労務管理の諸事例の分析に加えて、本研究はさらにル・コルビュジエに代表されるモダニズム建築を新たな材料として研究を行った。

他方で批判的研究に関しては、身体制度と標準化の結びつきにより作り上げられた社会空間が特定の人々の排除をもたらしている現状を踏まえながら、今日広く社会規範を根拠づける理論として参照されているロールズ正義論の再検討を行うことで研究を遂行した。とくに自由の理解をめぐる意志論的アプローチと身体論的アプローチの対比の可能性を探り、前者の限界を確認することで、今日の社会規範の根底を形作る自由をめぐる新しい理解の可能性を検討した。

参考文献

障害者の人権白書づくり実行委員会、『障害者の人権白書』、1998年など

4. 研究成果

(1) 雑誌論文

：論文「社会的排除と身体制度 「障害の社会的構成」に関するもう一つの視点について」

本論文では、「障害の社会的構成」に関する従来の議論を踏まえながら、文化 表象論的な議論とは異なる機能主義的な立論の可能性を提示した。方法としては、具体的な障害事例を題材としながら身体と物理的環境の間の機能的不一致の様態を分析した。この分析は、機能的不一致の様態を大きく記号、人工物、対他行為の三つの領域に分けたうえで遂行され、その結果としてそれぞれに対する原理的な特徴づけも行った。

次に本論文では、以上の分析に基づいて、新しい「社会的構成」の観点の理論的基礎づけも行った。具体的には、機能主義社会学における役割概念を身体論的観点から再解釈した「身体制度」という新しい分析概念を提示し、これによって障害の「社会 機能的構成」の基本的な理解を提示した。

：論文「カント倫理学の社会化における自

由と身体 センのロールズ批判を手掛かりに」

本論文では、アマルティア・センのロールズ批判を手掛かりとして、自由理解の身体論的拡張の試みを行った。

具体的には、まずカントの自由思想を分析することで、それが「意志論的アプローチ」によって成立していることを解明し、その上で、カント倫理学の社会化を試みるロールズの正義論が、やはり自由の理解においてカントの意志論的アプローチを受け継いでいる点を明らかにした。

他方で、センのロールズ正義論への批判は、とくに選択における自由に関心を向ける意志論的アプローチではなく、選択を現に実行することの可否に関心を向けるケイパビリティ・アプローチの観点から展開されている点を明らかにした。センによるこの批判は、ロールズの正義論は財を実際の機能へと変換する「利用関数」の多様性を把握できていないという部分を論点とするものであるが、本論文ではこの利用関数の多様性が身体的多様性によって生じるものである点に着目し、身体論的観点の導入を行った。

最終的に本論文ではロールズの正義論における身体論の不在を指摘しつつ、他方で『判断力批判』におけるカントの自由理解のうちに、自由に対する新しい身体論的理解の可能性が潜んでいることを明らかにした。

(2) 学会発表

：「自由と身体 カント倫理学の社会化に関する地理学的批判を通じて」

これは雑誌論文「カント倫理学の社会化における自由と身体 センのロールズ批判を手掛かりに」と同内容である。

：「機械の社会思想小史 身体の植民地化をめぐる」

本発表は、マルクスの『資本論』における大工業制機械論に加えて、テイラー主義やフォード主義において取られた身体の動作研究を通じた合理化のプロセスなどを検討し、機械が近代社会にもたらした影響を思想的観点から考察したものである。とくに、アーキテクチャ論やアクターネットワーク理論などと M.フーコーの規律論を比較し、「身体植民地化」という物理的身体の技術的操作のメカニズムを分析した。

：「障害をめぐるモダニズムとポストモダニズム」

本発表は、障害の問題を題材に、効率性と多様性という相反する規範の関係性を考察したものである。とりわけ建築思想の発展の跡づけとともに、効率性の規範を都市計画にまで反映させたル・コルビュジエ以来のモダニズム建築と、モダニズム建築への批判から多様性の規範を掲げたポストモダニズム建築の間に見られる規範の棲み分けの問題を

論じ、物質的「機能」と記号的「意味」の関係性を考察した。

(3) 総括

以上、本研究は当初の研究目的と計画された研究方法に基づき学术论文2件、研究発表3件の成果をあげた。これらはいずれも身体論の観点から従来の議論に新しい展開や理解の可能性を加えるものであり、その点に新規性を有している。とくにその身体論が、従来の現象学的身体論で扱われる現象的身体ではなく、また文化論において扱われる表象/イメージとしての身体でもなく、機能主義的観点から捉えられる物理的身体に基づくものである点に本研究の特異性があり、この新しい論点に対するアプローチの理論的土台となり得るものを成果として提出するところに本研究の固有のインパクトが認められる。これは、高齢化や障害の問題に関わる今後の研究の発展に対して、独自の意義を有すると期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

(1) 見附陽介、「カント倫理学の社会化における自由と身体 センのロールズ批判を手掛かりに」、『倫理学年報』(日本倫理学会編)、第六十六集、査読有、2017、pp.85-98

(2) 見附陽介、「社会的排除と身体制度 「障害の社会的構成」に関するもう一つの視点について」、『障害学研究』(障害学会編) 11号、査読有、2016、pp.132-155

[学会発表](計 3 件)

(1) 見附陽介、「障害をめぐるモダニズムとポストモダニズム」、障害学会・第13回大会、2016年11月6日、東京家政大学・板橋キャンパス(東京都板橋区)

(2) 見附陽介、「機械の社会思想小史 身体の植民地化をめぐる」、社会思想史学会・第40回大会、2015年11月7日、関西大学・千里山キャンパス(大阪府吹田市)

(3) 見附陽介、「自由と身体 カント倫理学の社会化に関する地理学的批判を通じて」、日本倫理学会・第65回大会、2014年10月4日、一橋大学・国立キャンパス(東京都国立市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

見附 陽介 (Mitsuke, Yousuke)

北海道大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：10584360